様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科研費
KAKENHI

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５年　６月１２日現在

機関番号：３２６７０

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：１８Ｋ００４８８

研究課題名（和文）林忠正関連資料の再発掘による19世紀末～20世紀初頭の日仏関係史の再考察

研究課題名（英文）Reconsideration of the History of Franco-Japanese Relations from the End of 19th to the Beginning of 20th through the Re-Examination of the Documents Relating to Tadamasa HAYASHI

研究代表者

高頭　麻子（TAKATO, Mako）

日本女子大学・文学部・研究員

研究者番号：６０２８７７９５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：１）林忠正関連の木々康子蒐集史資料をデータ化し目録を作成した。それらの史資料についての、木々康子の長年の考察・研究成果の書き下ろしに、研究代表者が注をつけた。
２）林忠正の言動を、明治日本の美術政策（近代国家としての日本のアイデンティティを醸成するもの）の歴史の諸段階において考察し、他方では、19世紀末パリの文化・芸術思潮の歴史に位置付ける考察を行った。
３）１）の史資料の写真の主要なもの、木々康子の研究考察の集大成、２）の研究代表者による2論考を、木々康子・高頭麻子　編著『美術商 林忠正の軌跡1853-1906　19世紀末パリと明治日本とに引き裂かれて』（藤原書店、総頁数713）にまとめた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
木々康子が林家から継承した第一次史料と木々が蒐集した史資料をデータ化し、主要なものを上記単行本に掲載した。同書には、新発見の林忠正宛書簡150通の和訳、林忠正の家系図、3種の年表、『海外のポスター』（1897）の「日本」の項（林忠正執筆）の和訳、林が書いた『高岡銅器維持の意見』の現代語訳も掲載した。同書は資料的な面でも、19世紀末日仏文化交流の研究に有用と考える。
　関連研究者や国立西洋美術館学芸員と協力して、既刊の林忠正宛書簡集（原語版、和訳版）に収録した約800通の書簡と新発見の150通を、2023年度中に、同美術館のサイトにオンライン公開する。世界中の1900年前後の研究者に有用と考える。

研究成果の概要（英文）：１）We have made a categorized digital list of the documents relating to Tadamasa HAYASHI, which Yasuko KIGI had personally inherited or collected through her years ’ research. KIGI has written a new essay on the achievement of her years ’ research of Tadamasa HAYASHI and TAKATO has confirmed the sources of her research for making its notes.
2) We have tried to consider HAYASHI ’s actions, on the one hand, in the context of the history of art-policy of Meiji Government (because the policy was very important to establish the identity of Japan as a modern nation), on the other in that of cultural movements of Paris at the end of 19th.
3)We ’ve published a book, The Trail of the Art Marchant, Tadamasa HAYASHI(1853-1906) : torn between Paris at the end of the 19th century and Japan at the Meiji Era, (Fujiwara Shoten, 2022) under co-authorship, in which we ’ve published the primary photos and the achievement of KIGI ’s long time research (1) and the results of TAKATO ’s considerations (2).

研究分野：人文学

キーワード：林忠正　ジャポニスム　19世紀末パリ　明治の美術政策　パリ万博　浮世絵の輸出　フェノロサ　ポスターの歴史

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景
１）これまで、林忠正の人物像、言動について、彼の家系から全生涯にわたって、最も詳細に、最も系統立てて研究し、叙述してきたのは木々康子である。木々は、当初、小説家として、林の先祖たちの幕末・明治期の政治社会思想・闘争を描く『蒼龍の系譜』（筑摩書房、1976、第 17 回田村敏子賞）や、林の従兄でパリ大学法学部卒業後、日本の民法作成・大逆事件弁護等の活動をした磯部四郎、林らの国際派が富国強兵の波に呑み込まれていく明治期の歴史を描く『陽が昇るとき』（筑摩書房、1984）の創作のために、林忠正の関係資料を蒐集した。研究者たちから、それらの資料の公開を求められて、ノンフィクションとして『林忠正とその時代』（筑摩書房 1987）、『林忠正―浮世絵を越えて日本美術すべてを』（ミネルヴァ書房、2009）、『春画と印象派』（筑摩書房、2015）を上梓し、『林忠正宛書簡・資料集』（信山社、2003）を編み、『林忠正コレクション＜復刻版＞』（ゆまに書房、1999）の監修をし、国際シンポジウム「林忠正とジャポニスム」の基調講演（林忠正シンポジウム実行委員会編 『林忠正　ジャポニスムと文化交流（英和文対訳）』ブリュッケ、2007 所収）など、多くの講演・エッセイを発表してきた。
２）しかし、これまで発表されたものは、木々の所有・収集する史資料のすべてではない。木々の高齢化と、史資料の劣化に直面し、これらのデータ化、分類・整理して目録を作成する必要があった。
３）また、木々以外の研究者は、各自の専門領域に関わる部分でのみ、林忠正について論じているが、大きく分けて西洋美術史と日本美術史の各分野の、さらに細分化された領域・時代に焦点を当てたものである。林の言動の全体を 19 世紀末から 20 世紀初頭の日仏の大きな歴史の流れの中に位置づけ、考察する視点はこれまで殆どなかった。

２．研究の目的
　上記の「研究開始当初の背景」を踏まえて、本研究は、作家木々康子が長年の資料探求に際し獲得した有形無形の様々な情報を整理し記録するとともに、当時の日仏相互の文化状況の中に林忠正の言動を置き直し、世界史的な広い視野において考察するものである。
　日本美術は西洋の美術に大きな影響を与えたが、林忠正は、日本人の生活感、自然観、芸術観を客観的にフランス語で説明することにより、日本文化に対する正確で深い理解を広めようとした。他方、日清戦争の勝利や日本美術ブームに奢る美術工芸品の生産輸出業者や、洋画を排斥した岡倉天心ら、美術の近代的な研究・理解も科学的な展示・広報活動も知らない日本人万博関係者に国際基準を示し、日本を文化的一等国にしようと努めた。このいずれにおいても、林は、父から学んだ近代西洋科学の精神と国学的教養や倫理観、義父から期待された維新・革新の精神とに裏付けられた、明治の男子特有の愛国心を貫いたと思われる。
　西洋美術史や日本美術史の先行研究は、各研究者の専門領域に於ける林の言動には触れても、19 世紀末という歴史が大きく動いた日仏両国の狭間で、林がどのように思考・活動したかを、日仏の広い歴史の流れの中に位置付けるものはなかった。本研究では、彼がどのような人物たちとの交流、さまざまな幸運・不運な出会いや出来事を受け止め、乗り越えていったかを、大きな視野で考察するものである。

３．研究の方法
　当初、以下の 4 点において考察を進めたいと考えた。
１）林家（木々康子）所蔵の林忠正に直接関係する品々、木々が収集した林関連の文献、その他の史資料をデータ化し、分類・整理して目録を作成する。また、木々が 50 年にわたる研究・資料探索に際して獲得した様々な情報・考察を記録する。
２）フランスのオルセー美術館、ジヴェルニー「モネの家と庭園」、フランス国立図書館のほか、林が関係したイギリス・ドイツ・ベルギーなどヨーロッパ諸国の美術館、林が万博に参加した米国のボストンやシカゴなどを訪ね、文献収集とともに、学芸員と会って現地調査を行う。
３）19 世紀末の日欧それぞれの美術をめぐる環境について、また相互の影響関係と林忠正の立場・関わり方の変遷についての考察を深める。まず、春画の西洋への影響を論じる新しい研究などにより、西欧でも数年前まで水面下に隠されてきた春画が、19 世紀に広まった経緯や影響を探求する。
４）一方で、明治期の日本政府の文化政策がどのようなものであったか、庶民の娯楽であった浮世絵や春画の流出を恥と考え、どのように理想の「日本的なるもの」を構築しナショナリズムを醸成させていったかを、明治初期の内務省・文部省・農商務省等の文書やフェノロサの日本美術論をめぐる美術界の論調などを通して明らかにするとともに、林忠正をパリ万博の事務官長に推挙した伊藤博文・西園寺公望らとの関係、彼らの考えの変遷や、万博をめぐって林に誹謗中傷を浴びせた日本のメディアの論調などと合わせて考察する。
５）普仏戦争から立ち直り、さまざまな芸術運動・思潮が花開いた世紀末パリの文化状況は、1900

年パリ万博で頂点を迎え、ジャポニスムも同様に万博をピークに衰退に向かい、日本もフランスも共にナショナリズムの時代に突き進んでいく。とりわけ日露戦争中は、林の周囲の西欧人たちの中にも、日本の兵士の勇敢さを讃える者もあれば、アジアの国々の台頭を恐れる黄禍論も少なくなかった。19 世紀末から 20 世紀への転換期の文化・社会の変化を、当時の日仏の新聞などの関連記事で探るとともに、1900 年を境に急速に変化した日仏の文化社会状況とその理由も考察する。
６）これらの研究について、１）、２）の成果を、林関連資料データと木々康子の研究の集大成として、また、３）、４）、５）について研究代表者の考察を本にまとめる。

４．研究成果

上記の「研究の方法」は、2020 年～2023 年春のコロナ禍のため、大きな影響を被り、本科学研究費の助成期間を 2 年延長していただいたうえ、一部の研究方法の実施を諦め、内容を変更する必要が生じた。具体的には、2）の海外現地調査は、結局、全く実現できなかった。また、3）の春画の研究も、現代でさえ大っぴらに公開されている分野ではないため、現地調査なしでは、先行研究以上のことは望めず、今回は断念した。

2 年延期して 5 年間の研究の成果（「研究の方法」の６））として、2022 年暮れに、木々康子・高頭麻子　編著『美術商 林忠正の軌跡 1853-1906　19 世紀末パリと明治日本とに引き裂かれて』（藤原書店、全 713 頁）を出版した。

「研究の方法」の１）については、木々康子が林家から継承した第一次史料と木々が蒐集した史資料の大部分をスキャン・写真撮影などでデータ化し、分類・整理した。そのごく一部だが、一冊の書物としては数多くの写真掲載（カラー口絵 16 頁、白黒口絵 32 頁ほか、本文にも多数挿入）を上記単行本に掲載した。また、木々がこれまでの研究の集大成として国立西洋美術館「林忠正展」(2019）のために書きおろした林関連資料の解説を、上記単行本の第Ⅰ部「史資料を通して見る林忠正の生涯」（全 6 章、194 頁）に掲載し、研究代表者が注をつけた。
４)、５）については、上記単行本の第Ⅱ部「林忠正を読み直す」（約 200 頁）の第 1 章「明治日本の美術政策と林忠正の活動」、第 2 章「日仏ポスター史に林忠正を位置づける」、および第Ⅲ部「新発見の林忠正宛書簡を読む」の「＜解題＞ジャポニスム衰退後の林忠正」（約 70 頁）にまとめた。
第Ⅱ部第 1 章では、明治初期には殖産興業政策の目玉であった日本美術が、次第に近代国家としての日本のアイデンティティの表象となっていった、美術政策の変遷の各段階への林の関わり方、彼の一貫した姿勢を示した。第 2 章は、19.世紀末のポスター大流行にも拘わらず、美術史研究者の詳しい研究が日本でも海外でも少ないことへの疑問から、「ポスター史」は可能か、という問いを立て、ポスターという美術史の鬼っ子の、社会思想・政治プロパガンダとの関係など、長いスパンでは語られてこなかったポスターの歴史の中に、林が執筆した日本のポスターについての一文を位置づける試みである。第Ⅲ部には、150 通の新発見書簡の解読から見えてきたこと、とりわけジャポニスムが商売として成り立たなくなっていた 1890 年代半ば以降の林の動向、将来展望などの考察を置いた。林が美術評論家らと単なる日本美術の解説にとどまらず広く文化・美術・思想の全般について論じ合う関係であったこと、これまで林の近代絵画への理解は印象派の一部までと言われてきたが、象徴主義の画家らとの交流にも注目した。
なお、今後の林忠正研究に役立つよう、同書には、新発見の林忠正宛書簡 150 通の和訳のほか、林忠正の家系図、3 種の年表、1897 年にフランスで出版された大型本『海外のポスター』内の「日本」の項目（林忠正執筆）の和訳、林が書いた『高岡銅器維持の意見』の現代語訳も掲載した。
さらに、すでに書物として公開されている『林忠正宛書簡集』（原語版、国書刊行会、2001)、『林忠正宛書簡・資料集』（和訳版、信山社、2003）に収録した約 800 通の書簡と新発見の 150 通を、国立西洋美術館のサイトにオンライン公開することとし、同美術館学芸員と協力して、すでに大部分を公開しており、2023 年度中にすべてを公開する見込みである。林忠正のみならず、1900 年前後の美術史を研究する世界中の研究者に有用なものと考える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 高頭麻子	４．巻 第4巻3号
２．論文標題 ブリュッセルの”肉体の悪魔”について ―ベルエポックのもう一つのキャバレー	５．発行年 2021年
３．雑誌名 総合社会科学	６．最初と最後の頁 pp.15-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 高頭麻子	４．巻 483
２．論文標題 「日本人が意識していない美術とその歴史の価値を世界に伝える」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 SMBCマネジメント	６．最初と最後の頁 10-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 平野啓一郎・阿部賢一・坂井セシル・高頭麻子	４．巻 28
２．論文標題 文学とグローバルの隙間	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日本フランス語フランス文学会関東支部論集	６．最初と最後の頁 97－140
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 高頭麻子	４．巻 第31号
２．論文標題 フランスで初めて刊行された日本語新聞『世のうはさ』をめぐって	５．発行年 2019年
３．雑誌名 総合社会科学研究	６．最初と最後の頁 ⅰ～ⅶ
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Mako TAKATO	4．巻 なし
2．論文標題 Edmond de Goncourt et Tadamasa HAYASHI ou l’amitie entre artistes a la fin du XIXe siecle	5．発行年 2022年
3．雑誌名 エドモン・ド・ゴンクール生誕200周年記念シンポジウム『ゴンクール兄弟ー日本、女性、文学と芸術における独自性』成果報告論文集	6．最初と最後の頁 16-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　3件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 馬渕明子・高頭麻子
2．発表標題 特別対談「林忠正―〈ここ〉と〈遠く〉をつないだひと」
3．学会等名 高岡市美術館（招待講演）
4．発表年 2021年

1．発表者名 高頭麻子
2．発表標題 インタビュー「林忠正とポール・ルヌアール」
3．学会等名 NHK８K番組「東博159周年　知られざるモノがたり」（招待講演）
4．発表年 2022年

1．発表者名 Mako TAKATO
2．発表標題 Edmond de Goncourt et Tadamasa HAYASHI
3．学会等名 エドモン・ド・ゴンクール生誕200周年記念シンポジウム（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2022年

〔図書〕　計1件

1．著者名	4．発行年
木々 康子、高頭 麻子	2022年
2．出版社 藤原書店	5．総ページ数 720
3．書名 美術商・林忠正の軌跡 1853-1906	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関